

## 質疑応答

### ○杉浦専務理事

梶ヶ谷先生、どうもありがとうございました。高校生になり切って生徒役をしてくださった大学生の皆様もありがとうございました。

今日は、非常に興味深い素晴らしい議論が続けられてきました。もし、ご質問があったら1つだけお受けしたいと思います。今日ご登壇されたどなたかに対するご質問だったら、どなたに対するものか言ってください。お一方、ご質問をお受けいたします。

### ○質問者

大変興味深く拝聴した。ライフネット生命会長の出口さんに1つ質問したい。トータルの経済の循環の話や、他の国における民間保険と公的保険の話があった。先ほどの学生さんの中で高福祉・高負担を望む方は誰もおられなかったが、北欧では、国民負担率が7割である一方、教育費あるいは健康保険料はフリーである。その結果、非常にダイナミックな動きがあると私は理解している。

北欧では国民負担率のトータルの中で年金の部分は割割ぐらいになっていて、なぜそういうことが可能になっているのか。

また、今回マイナンバーの話は出なかったが、プライバシー保護の非常に強いアメリカでもソーシャルセキュリティーナンバーで公平性を担保している。

なぜ、北欧で高率の国民負担が可能になっているのか、また、日本がマイナンバーの運用を始めた場合、いかにして公平性を担保できるかご意見を伺いたい。

### ○出口氏

かなり難しい質問で、きちんと答えられるかどうか自信がないが、3つぐらいに区切ってお答えしたい。

まず、今日の講義の中で学生の皆さんに負担と給付のバランスに関する問い掛けがあった。あの問いかけはすごくいいと思う。基本は、負担が給付である。例えば、ゴミ集めは誰もやりたくないの、放っておけば東京中が汚くなる。そこで、その費用負担を税金という形で集めて政府がゴミを集める。低い負担で高い給付が得られるという例は世界中のどこにもあり得ない。負担が給付であるという恒等式があることをまずしっかりと覚えるべきと思う。

社会保険料は特別目的税と考えてよいので、そうであれば、税も社会保険料も同じである。例えば、僕たちが赤十字の募金でアフリカの子どものために100円募金したとする。80円ぐらいはアフリカの子どものために渡したいが、実際は20~30円しか渡らない。そこには間に立つ赤十字(政府)の経費が存在するからである。

こう考えると、できるだけ政府の経費を小さくする、小さい政府が必要だとの議論になる。要するに「負担も給付も極力シンプルに設計する」という大原則が出てくると思う。これが小さな政府の根源的な議論で、平たく言えば、赤十字に100円寄付したら80円ぐらいはアフリカの子供たちに届けてほしいという話だ。

2つ目は、給付のレベルは市民が決めるべきだという議論だ。小さい政府の議論には混同があって、1つ目のオペレーションの話と、2つ目の給付のレベルの話がごっちゃになっている。給付のレベルが常にシビルミニマムであることが政府の役割ではない。極端に言えば、医療や教育は全部タダにしてほしい。そうしたら100%安心できるから思い切って働ける。そのときの負担は大きくてもやむを得ない。こういう議論を1つ目の話と混同してはいけない。

小さい政府という、負担も給付もシンプルな制度でオペレーションを行うという問題と、給付のレベルをどうするかということは、違う問題だと思う。

北欧は給付が厚いので負担も大きいのだが、国際競争力ランキングの上ではいつもトップ10に入っている。

3つ目の問題は、負担と給付が極力フェアであるということが民主政治ではものすごく大切だと思う。フェアであるということを単純に考えたら、みんなが所得や資産をできるだけ透明にして、みんなが納得できるようにシンプルに負担し、給付を受けるということだと思う。そこは、ご質問の方が言われたように、マイナンバーを活用すべきだと思う。

マイナンバーは、市民と政府が対立していると考えたら、政府にそんなものを持たせたらとんでもないという発想になる。政府は、市民の対立概念ではなく、政府は市民がつくるものなのだ。われわれが公正な社会をつくるためにマイナンバーをみんなでかしく使うのだという方向へ議論を持っていく努力をすべきである。確か、G7でも、マイナンバーがないのはフランスだけだと思う。他の国は、全部マイナンバーを使っている。

きちんとしたお答えになっているかどうか分からないが、根源的な小さな政府の問題と、給付をどのレベルにするかという問題と、できるだけフェアにそういう社会をつくっていくためのマイナンバーの問題と、この3つの問題があるように思っている。

#### ○杉浦専務理事

ありがとうございました。まだご質問がおありかと思うが、時間になったのでこれで終わらせていただきます。今日は、お忙しい中皆さま多数お集まりいただき、ありがとうございました。これからも、日経調では、シンポジウムや講演会、勉強会、報告書等々、いろいろな情報を発信していくので、ぜひ皆さまご活用いただきたいと思います。

今日は、どうもありがとうございました。